VOL. 5（平成31年4月）
発行：道路局橋梁課

はしのはなし

第五稿
魅力ある親柱特集（前編）

「はしのはなし」では、皆さんに横浜の橋の歴史や小話を、定期的に紹介していきます。第5回目は、魅力ある親柱特集（前編）。前編6区・中編6区・後編6区にわけて、各区それぞれから魅力ある、特徴的な親柱を紹介したいと思います。

1　潮鶴橋（鶴見区）

潮鶴橋の親柱

左が潮鶴橋、右が新潮鶴橋。橋下から望む。

現在の潮鶴橋は昭和15年10月に当初架けたものを昭和63年３月に架け替えたものになります。潮鶴橋のすぐ隣には昭和42年12月に架けられた新潮鶴橋があり、今となっては新潮鶴橋のほうが築年数が経っているのも歴史を感じます。左写真の親柱は初代潮鶴橋のもので、現在は潮鶴橋と新潮鶴橋の間に2基設置されています。

2　寿老橋（神奈川区）

寿老橋の親柱

寿老橋右岸上流より橋面を望む。

現在の寿老橋は昭和6年に当初架けたものを平成3年8月に架け替えたものになります。この地域にはほかにも大黒橋(S7竣工、S54.3架替)、恵比須橋（S8竣工、H9.10架替）、布袋橋（S8竣工、H1.2架替）、新辨天橋（S6竣工、H7廃止）といった七福神に因んだ橋が架けられました。左写真の親柱は初代寿老橋の親柱で橋の4隅に設置されています。

3　北幸橋（西区）

北幸橋の親柱・照明柱

右岸下流より北幸橋を望む。

北幸橋は平成8年11月に帷子川分水路の整備計画・帷子川プロムナード計画と連携しつつ架け替えられた橋です。橋の四隅に設置されている湾曲した巨大な柱は正確には照明柱であり、その前に設置された躯体が親柱になりますが、高さ約10.4mにもなるそれは強い存在感をもち、横浜駅西口広場へのゲートとしての役割を果たしています。

4　辨天橋（中区）

辨天橋の親柱

上流住吉橋より辨天橋を望む。

現在の辨天橋は昭和3年10月に関東大震災の復興事業で架け替えられたものを昭和51年3月に大規模改修したものになります。四隅に設置されている親柱は大規模改修時に設置されたもので、デザインテーマは「未来へのぞむ帆」であり、万里の波濤、あらゆる苦難をのりこえて、目的に直進するヨットの追い風用の帆が順風満帆を受けて快走する横浜市の未来をこい願って形象したものだそうです。

5　道慶橋（南区）

道慶橋の親柱

右岸上流より道慶橋を望む。

現在の道慶橋は昭和3年に関東大震災の復興事業で架け替えられました。道慶橋のはじまりは古く、万治元年（1658）に雲水僧道慶師が、不便な舟渡しに付近住民が難儀していたことから、独力で橋を架けたことから由来するそうです。親柱の上に設置された装飾は震災復興時の意匠ではありませんが、道慶師に因んだ錫杖（しゃくじょうと読み、僧が持ち歩杖のことを言う）のデザインとし、平成元年3月に設置しました。

6　大久保橋（港南区）

大久保橋の親柱

上流より大久保橋を望む。

現在の大久保橋は昭和63年3月に架け替えられました。親柱上に設置された八角形の灯具には、寺院の灯篭を想起させる和風な意匠が施されています。また親柱に設置されている橋名板が一般的なものより大きいためか、重厚さや存在感を一層感じることができます。